

ときめき インタビュー



高橋 大輔
たかはし だいすけ/Daisuke Takahashi

…プロフィール…

昭和55年、越谷市生まれ。現在は小川町在住。越谷東高校卒業後、1年の浪人期間を経て、東京造形大学に入学し、平成17年に同大学・造形学部美術学科絵画専攻を卒業。卒業した年に初の個展『象風景』を開催。以降、毎年さまざまなスタイルの個展やグループ展を行う。今年9～11月に埼玉県立近代美術館で開催された『NEW VISION SAITAMA 5 追り出す身体』では、約70点もの新作を発表するなど、意欲的な活動を続けている。

平面的な油絵とは一線を画す、絵の具をたっぷりと塗り重ねた立体的な作風で知られる画家・高橋大輔さん。大胆さと繊細さが入り混じったタッチで色彩豊かに描かれた作品には、思わず触れたいような独特な存在感があります。そんな個性的な作品が生まれたきっかけ、また今後の活動について伺いました。

★制作期間17カ月！ 苦しんだ末に大作が完成

今秋、埼玉県出身の若手芸術家7人を集めて埼玉県立近代美術館で開催された企画展で、約70点に及ぶ新作を発表した高橋さん。この企画展では「展示する空間をどうおもしるく表現するか」ということにこだわり、作品を仕上げたと言います。

「今回、特に苦労したのが80号(97センチ×147センチ)の油絵(※1)。透明感を大切に描き進めて、僕の中にあった最初のイメージは「薄い青」だったんですが、描きながら

らあだだこうだと試行錯誤して。結局、完成したと思えるまでに17

カ月かかって、仕上がりは当初のイメージとはほぼ違うものになりました(笑)。見てくださる人に

伝わるかどうかは分かりませんが、僕自身は絵の具がどんなに塗り重な

なっているか透明感を意識して描けたと思っています」と高橋さん。

高橋さんの絵は正面から見ても絵の具の隆起がよく分かりますが、

真横から見るとその厚みに驚くばかり。でも絵から受ける印象は厚

塗りの重苦しさはありません。「作品を創るときにいつも思っ

ているのは「絵画でありたい」と

★恩師の一言から

「抽象画」「そして」「厚塗り」

「幼稚園のとき、友達を描いた

絵が上手なのに驚いて、思わずそ

の絵を模写したことが僕が絵を描

いた最初の記憶」という高橋さん。

幼い日から絵を描くことへの興味

は尽きることなく、中学一年生の

なる娘さんと一緒に小川町に在住。

実家のある越谷には、よく訪れて

いるそうです。

「越谷で好きなのは川。絵のア

イデアを考えるために土手をブラ

ブラしたり、ジョギングすること

もあります。それからなんといっ

ても南越谷阿波踊りが大好き！

小学5年から中学一年までの3年

間、踊り手をやっていたこともあ

るんです。去年は娘を連れて見

に来ました。今年は用事で越谷に

来た日が偶然阿波踊りの日で、駅

を降りたら鳴り物の音が聞こえて

来たんです。その時はちょっと

疲れていたんですが、阿波踊りの

ちよっと異様な作風がイイんで「す」

現在の高橋さんには、変わりたい願望が。

「この描き方でできる表現の限

界も見えてきた。周囲が「厚塗り

」高橋大輔らしさ」と認識してい

ると同時に、僕自身がその作風

にとらわれている感じもしていて

作風を捨てるのはすごく勇気がい

ることですが、そのくらいの覚悟

を持たないと変われないのも事実なので、今はいろんな手法を模索

しているところ。もしかしたら厚塗

りでも、抽象画でさえなくなる

かもしれない…といったつ、数年

たっても見た目は何も変わってい

ない可能性もある。まだ未知数で

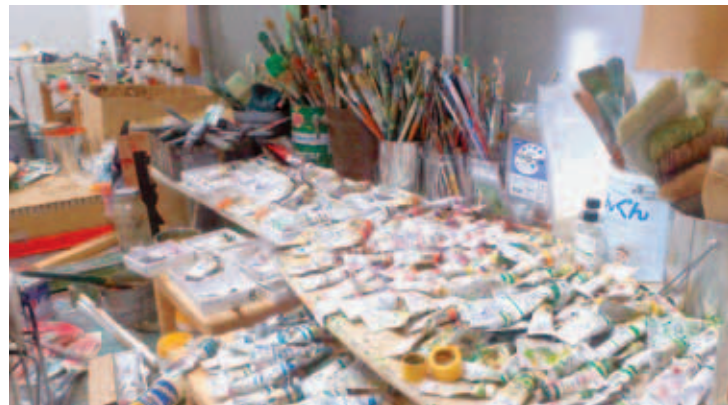
すね」

★阿波踊りが大好き 見ると疲れが吹き飛ぶ

高橋さんは現在、奥様と3歳に



(※1)「タイトル未定」2015-2016
パネルにマウントしたキャンバス、油彩 (撮影：椎木静寧)



筆は大小合わせて350本以上、絵の具も常時100色以上、400本をストックしている

ころ、恩師の薦めもあって美術系の大学へ進みます。「予備校のころから写実の画家たちに影響を受けて、具象画を描いていました。ある時、そんな僕の絵を見た予備校の先生に「写実は訓練すれば誰でもできるし、既に巨匠もいる。これから君がそれをやっても超えられないんじゃないかな」と言われて、はっとしました。そこから抽象画というジャンルを意識するようになりましたね」

また高橋さん独特の厚塗

りの手法への転換も、お世

話になった教授のひと言が

ヒントに。「僕の2回目の個

展を見に来てくれた教授が、

僕の絵を眺めながら不意に「彫刻

家の宮脇愛子さんの描く絵は重

んだよね」と言ったんです。その言

葉が僕の中にすく引つかかって、

絵が重いつてどういことだろ

う? と考えていくうちに、どん

どん塗り重ねる絵の具の量が増え

て、現在のスタイルになりました」



ペインティングの現在 展示風景 川越市立美術館 2015
(撮影：椎木静寧)
高橋さんの作品は公式ホームページでご覧になれます
<http://daisuke.official.jp/>

★「変わりたい」願望 かつ「つと湧き上がる

20代後半で現在の作風にたどりつき、30代に入ると、日本画から創作意欲をかき立てられることが

音を聞いたとたん、疲れがパァ、と吹き飛びましたね」と笑顔で語る高橋さんは、子育てにも奮闘中だそうです。

「10代20代のころは、18時間ぶつ続けで絵を描いたこともありましたが、いまは娘にも手が掛かるので、そこまで絵に没頭できな

い。でもそういう日々の暮らしと

向き合いながら、新しい絵の世界を生み出していかたいなと思っています」

穏やかな口調で話す姿に、娘さんの成長や日常生活を大切にしている優しい人柄がにじみ出ている高橋さん。これからのようなアートを発信してくれるのか、とても楽しみです。

「厚塗りの抽象画」という今までの自分らしさを打破して、新しい絵を創造したい。



画家 高橋 大輔 さん
たかはし だいすけ

「川を眺めるのが好きですね。自然に気が抜けて、リラックスできるから」